
太陽と月の神話

ソレイユ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽と月の神話

【Nコード】

N0370L

【作者名】

ソレイユ

【あらすじ】

唯一の血縁の祖母が死んで遺言に従ったの故郷、月見町に引っ越してきた市原咲夜。

祖母が勤めていた神社に参りに行ったら謎の男と会う……

日本神話を織り交ぜた学園ファンタジー……！！

第一話 人生が変わった瞬間

チリン……チリン……

深い森の奥底で、鈴が鳴る音がする。

「根の国、深くに」

歌うは年若い男。男の目の前には深い穴があった。

「我が霊力、喰らって蘇り給え」

瞬間

森全体が何か呼び覚まされたように深く鳴動した。しかしそれも一瞬のことですぐに鳴動は静まった。

「我が大願、叶えて貰うぞ……」

男の顔が笑うように歪んだ。

「さん。お姉さん！」

「ん？あ、悪い！寝てた」

「随分とぐっすり寝てたみたいですね。着きましたよ。2500円です」

「はい、ありがとうございます」

「じゃあ失礼します」

私の名前は、市原咲夜。15歳。昔から祖母の家で暮らしてきた。

「此処が月見町か……」

私の祖母と祖父が生まれた地。祖母は此処にある神社の巫女だったらしい。二人は駆け落ちして、遠い前住んでいた町まで逃げ出したらしい。祖母ながら豪胆な人だと思っ。

「もうアパートに荷物は送り込んでるしな」

そんな祖母がつい一ヶ月前、亡くなった。老衰だったらしい。幸せそうな寝顔だったから向こうで祖父と会っていたらいいなと思う。

「まずは神社に行かなきゃな……」

私は、祖母の遺言に従ってこちらに引つ越してきた。

「な、なんだこの階段」

地図を見ながら、昔教えてもらった神社の近くへと着いた。しかし「お祖母ちゃんこんなの上り下りしてたのか!？」目も眩むようになくなった階段があった。

「も、もう無理。だけど着いたー!」

永遠に続きそうな階段を上りきったその先に、祖母の勤めていた月見神社があった。神社自体は、小さいがとても美しい所だと思った。「まずは御参りつと」

よく祖母から言われていた。神様はいるんだよ、と。しかし私はあまり信じていなかった。私は見えないと信じない主義だから。だと御参りはする。それが祖母と二人の昔からの習慣。もう一人になつてしまつたが。

「よし、終わった。ん?」

御参りを済ませ、ふと辺りを見回してみると、神社の近くの池で空を見ていた男がいた。草色の和服に黒色の羽織をしている。ふと、こちらに気付いたのか男は後ろを振り向いた。

「サエの孫か。何故ここに」

振り返った男は、とても綺麗だった。整った顔立ちに短めに整えられた髪。一瞬目が黄金に光ったように見えた。

「あれ?お祖母ちゃんの事ですよ。何故知っているんですか?」祖母は駆け落ちしたつきり町とは連絡を取っていないらしい。しかし、目の前にいる男はかなり若い。せいぜい二十代ちょっとだ。

「まあいい。いずれ分かる。また此処に來い」

言いたいだけ言つと男は幻覺の様に掻き消えてしまった。

「え？あ、き、消えた……」

あの世にいるかも知れない祖母よ。私、神様信じてもいいような気がちよつとしました。

第一話 人生が変わった瞬間（後書き）

この小説はブログの方で掲載しているものをまとめたものです。
とりあえず第一話。実は私日本神話大好きです。むしろ神話全般大
好き。

第二話 神社の息子と私

何だったんだ。あれは。幽霊かそんなものなのか？いやだけど私の事祖母の孫だつて知ってたみたいだしそもそもあんな若い知り合いいたのか？

「どうしたんですか？」

「ぬわ!？」

思考に没頭している時、いきなり後ろから声をかけられ変な声を出してしまった。急いで振り返ると、同じ年くらいの少年が立っていた。髪を長めに伸ばして後ろで括っている。神社で神主じゃない男の人が着ている服装をしていた。

「あの、御気分が悪いようでしたら少し休まれていきませんか？」

「いや、大丈夫。心配してくれてありがとう」

「僕の名前は月見 弓彦ゆみひこといます。貴方は？」

「市原咲夜だ」

「市原さん。本当に大丈夫ですか？」

月見弓彦という少年は案外心配性のようだ。そのあと月見はこの神社の神主の息子だということ、五日後から通う清風高校の生徒だということが分かった。

「じゃあ同い年なんですね」

「ああ、敬語は無くてもいい」

「いや、これは癖みたいなので。此処の高校に通うって事は、このアパートですか？」

近くのベンチに座り、地図を見ながら話していると月見の手が入居したアパートを指した。「僕も此処に住んでいるんで。よかったですら案内しますよ」と微笑んだ。

「……私より女らしいな」

「えっ？」

「いや、何でもない」

どうやら聞こえなかったらしい。

「此処ですよ」

「ありがとう。本当に助かった」

「いえいえ」

アパートまで案内してもらってもらった。そういえばあの和服の男の事は月見は知っているのだろうか。気になってしまっただけ聞いてみることにした。

「あの、神社に和服の男に会ったんだけ「ええ！！あの七不思議に会ったんですか！？」」

どうやら有名ならしい。月見曰くあれは月見町七不思議の一つで「いつの間にかいる和服の男」らしい。ちなみに会ったら幸せになるそうだ。

「だけどあいつ、いや、何でもない」

「あの人の事ですか？確かに七不思議って呼ばれてますけど、たぶん普通の人ですよ？」

あんな目の前で消えてしまった話などをしたら頭を疑われるかもしれない。それだけは死んでも避けたかった。

「あ！あのさ、明日も神社行こうと思ってるんだけど」

「それだったら一緒に行きますよ。明日も日曜日で学校休みですし明日の約束をして、私たちは自分の部屋に入った。お守りを買ってなかったのもあるが、何よりあの男の言葉が気になる。」

「考えるのは明日でいいか……」

明日に回せるのは明日でいい。

「おい、月見」

「何ですか？」

「幸せになれるかもしれないぞ」

次の日、神社に行ったら、和服の男がいた。一緒にいた月見は目を輝かせて喜んでいた。本当に私より女らしいな。

「来たのか」

「来いつて言ったのは貴方でしょう？」

「知り合いなんですか?!」

「似たようなものだ。」

姉様の依巫よりましよ」

聞こえない。月見は何故か驚いている。いきなり耳が悪くなったのか?と思つたが他の言葉はしっかりと聞こえている。

「聞こえないか。会うまでは無理そうだな」

「……どういう意味ですか」

「今説明する。我が名は」

名を名乗ろうとした瞬間、横からきた衝撃に私は吹っ飛ばされた。

第二話 神社の息子と私（後書き）

早いですがためていたので。

ラブコメも入れたいな〜と思案中。

次はしばらくかかります。

第三話 月の神

横からきた衝撃に吹っ飛ばされ木の幹に強かに頭をぶつけた。頭が揺れる。体が支えられなくて倒れてしまった。

「市原さん！？血が……」

月見が慌てて近くまで来て慌てて来て血を拭い始めたようだ。目眩がしてよく見えない。

「貴様！何の用だ！」

「様からの伝言だ」

血を拭いて安静にさせようとしていた月見が震えている。何が起ったんだ？

「その娘は 巫女の娘か」

聞こえない

「様の計画の妨げとなる」

聞こえない

「この子はサエの孫だ。貴様らなどに渡すか。」

そこまで聞いた瞬間目の前が真っ暗になった。

……夢を見た。

「あら、ひさしぶりねえ」

「孫の顔を見に来たんだが。寝ているのか？」

「俺のひ孫だからな。顔は見たい」

男の声が聞こえる。此処はどこなのだろう。

「お、目え開けたぞ」

「サエの面影があるな。 の面影もある」

人の顔が見える。だがよく見えない。曇りガラスを通して見ているように顔がはつきりと見えない。片方は黒色の髪、もう片方は緑の髪……緑？ この世界に緑の髪って有りなのか？ だけど何故か懐かしくなつて泣きたくなつた。

「お、おい泣き始めたぞ！？うわ、どうしよう」

「 は子持ちだろう。育児には慣れていないのか」

「俺があやすと泣き始めるんだよ。ああ……よしよし」

体が持ち上がる感覚がする。緑の髪が困つたように揺れる。それが案外楽しくて笑つた。

「わ、笑つた」

「さすが、サエの孫だな。豪胆だ」

この二人、いいコンビだな。そう思っていたら、意識が遠くなつた。

「いいか、お前は俺の子であり 兄者の巫女だ」

そう聞こえた。

「……此処は？」

「うわ！まだ起きあがっちゃ駄目です！」

目覚めたら自分の家の布団の上だった。あの後昏倒した後此処に連れてこられたらしかった。

「起きたか」

横を見たら和服の男がいた。どうやら一緒に付き添ってくれていたらしいが、そんなことより聞きたいことが山ほどある。たぶん昔に

……

「あの、もしかして」

「我の名前が気になるか。」

ああ、この人の声は、名前は、夢の中で聞いた。冷たいが優しい声だ。

「我の名は」

この人の名は私の祖母が勤めていた神社の

「月読だ」

祭神だ。

「その他、いろいろ呼び名はあるが、これが一番伝わりやすいだろう」

私と月見が茫然としている間にいろいろ話をされた。しかしこれで納得はいく。いきなり目の前で消えた事も、目が金色に光ったこともだ。

「あ、あの、祭神様」

「どうした？弓彦よ」

「僕、何となく納得できましたけど、あの妖怪は何ですか？」

よく分からない。そう思っていると月見が分かってくれたらしくあのとき何が起こったのか説明しだした。

「祭神様が名乗ろうとした時、市原さんを殴った人がですね、いや……人ではありません。人のように見えましたが纏う空気がおかしかった。あれは、死人の気配です。人のようで人ではない。」

するとさっきの事を思い出したのか、少し震え始めた。背中を撫でてやりたかったが届かない。仕方がないので届く範囲にあった膝をさすってやった。

「とりあえず、今日は此処までだ。ゆっくり休め」

「ちよつと待ってください。聞きたいんですけど、もしかして子供のころの私と会ったことがあるんですか？」

「少し、な。あいつと一緒にだった」

そう言っただけで目を細めた姿は、親の瞳だった。

第三話 月の神（後書き）

まだまだ続きます

日本神話を調べたりしましたが月の神ってあんまり記述がないらしいですね

まあそれだから作りやすいのかもしれないんですが

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0370/>

太陽と月の神話

2010年10月11日20時38分発行